

体育における「学力」に関する研究

スポーツ文化研究領域

5012A058-2 三好和人

研究指導教員：吉永武史 准教授

【序章】

現行の学習指導要領改訂課程では「学力重視」の方針が明確に打ち出された(高橋, 2006, p.10). しかし, 学力が問題になるといつの時代も, 体育領域では「体力」が大きく取り上げられてきた. これは, 「知育・徳育・体育」という三育思想が依然として根深く残っており, 知育と体育が区別される傾向がいまだに強いことが影響しているといえる. しかしながら, 体育における「知」の学習の必要性に関してはこれまで多数の議論が展開され, 知育と体育そして徳育を統合させた体育学習のあり方は体育領域では常識となりつつある.

さらに現在は, 教科としてのアカウンタビリティが求められる時代にある. しかし, スポーツの楽しさの享受や体力の向上のみを体育の学習成果として提示するだけではアカウンタビリティに応えることはできない. さらに, 体育の学習はそれらに一元化できるものではなく, 知的な学習や態度の学習, 体に関する学習による体育の総合的な学習成果に基づいて体育の学力を主張し, 体育の意義が示されなければならない. しかしながら, 体育の学力に対する議論の方向性は定まっておらず, 体育の学力に関する生産的な議論がなされていないのが現状である. したがって, 体育の学力に関する生産的な議論を進めていくためには, まず体育の学力を捉えるための共通基盤を明らかにしていくことが急務の課題であるといえる.

そこで本研究では, 体育における学力がどのように捉えられてきたのかについての分析や教育学

領域の学力研究についての検討を通して, 体育の学力を捉えるための共通基盤を明らかにし, 今後の体育における学力研究の方向性を提案することを目的とした. 具体的には, 1) 1990年代以降の体育の動向から, 体育が直面している学力についての課題を明らかにすること, 2) 過去の体育の学力論議が, 現在の体育の学力の課題に対して示唆を与え得る視点をもって学力が捉えられていたのかを明らかにすること, 3) 教育学領域の学力論議を概観することによって, これからの体育の学力研究の方向性を明らかにすることを課題として設定した.

【第1章】

第1章では, 1990年代の体育の動向を示しながら, 現在の体育が直面している諸問題と, そこから導き出される現在の体育の課題について検討した. その結果, 現在の体育に求められていることは, 「学習内容の明確化」と「学習成果の明示」であるという示唆が得られた. 体育の学習成果の明示の重要性, つまり「評価」の視点が重要とされるようになり, 課題視されていることが示唆された.

【第2章】

第2章では, 第1章で明らかにされた明確な目標・内容を提示することやその学習成果を明確に示すという視点が, これまでの体育の学力論議の中に組み込まれていたか, また現在の課題を克服

し得る視点がこれまでの体育の学力論議にはあったかについて、これまでの体育の学力論議の変遷をたどることによって検討した。これまでの体育の学力論議は、育てるべき能力の内容を具体的に把握していこうとする取り組みが学力論の提示として論じられており、様々な論者が体育の学力を理念的かつ目標論的に語っていた傾向にあったことも確認された。また、ここには、評価の視点を含みこんだ論議がなされてはこなかったことが明らかになった。さらに、体育において学力をめぐる論争にまで発展しておらず、学力を捉えるための共通基盤を探る動きもみられていないことも明らかになった。

【第3章】

体育の学力を捉えるための共通基盤になる視点を抽出するために、教育学領域の学力論議の変遷を概観し、これからの体育の学力研究の方向性について検討した。これまでの教育学領域での学力論議の変遷より、現在の学力を追求する視点は、「確かな学力」を保障する評価のあり方と、それに基づく授業改善という点に目が向けられてきている。そこで、現在注目されている学力評価のあり方についての検討も行った。その結果、見えにくい学力を評価するための取り組みであるパフォーマンス評価が注目されるようになっていることや、そのような取り組みは体育においても徐々に研究が進められてきていることが明らかとなり、体育における見えにくい学力の評価方法の開発をさらに進めていくことの重要性を示唆した。

【結章】

以上の考察により、これからの体育の学力研究の方向性を提案した。

体育の学力の語られ方は評価の視点をもって学力を捉えるという議論が醸成していかなかった経緯があったことに鑑みれば、体育の学力を説得的

に示してきたとは言い難いといえる。学習成果が示されなければアカウンタビリティーを果たすことができず、学校体育の存在意義が失われてしまいかねない。そこで、現在の学力の計測可能性や評価可能性が重要とされることは、学校体育のアカウンタビリティーに応えることに対して大きく関与しているといえる。したがって、学力を捉える視点に評価可能性の視点を導入することに大きな意義が見出されるであろう。さまざまな評価システムを導入し、子どもの学力の現状を提示する場合にも、量的に明示可能な、いわゆるテスト学力に傾斜することは避けなければならない。このような一面的な学力ではなく、多様な評価方法を用いて、学力を多面的・重層的に捉え、見えにくい学力とされていたものを表出していくことは必要不可欠である。これまでの学力が計測可能なものだけであるとするのか、それとも不可能なものまでも全て学力とするのかといった二項対立的な図式で学力を論じ合うのではなく、評価方法の開発によって、いかにすれば学力の計測可能な範囲を広げられるかといった議論への転換の必要性を提案する。

引用・参考文献

高橋健夫（2006）学力重視と学校体育の展望．体育科教育，54（7）：p.10